

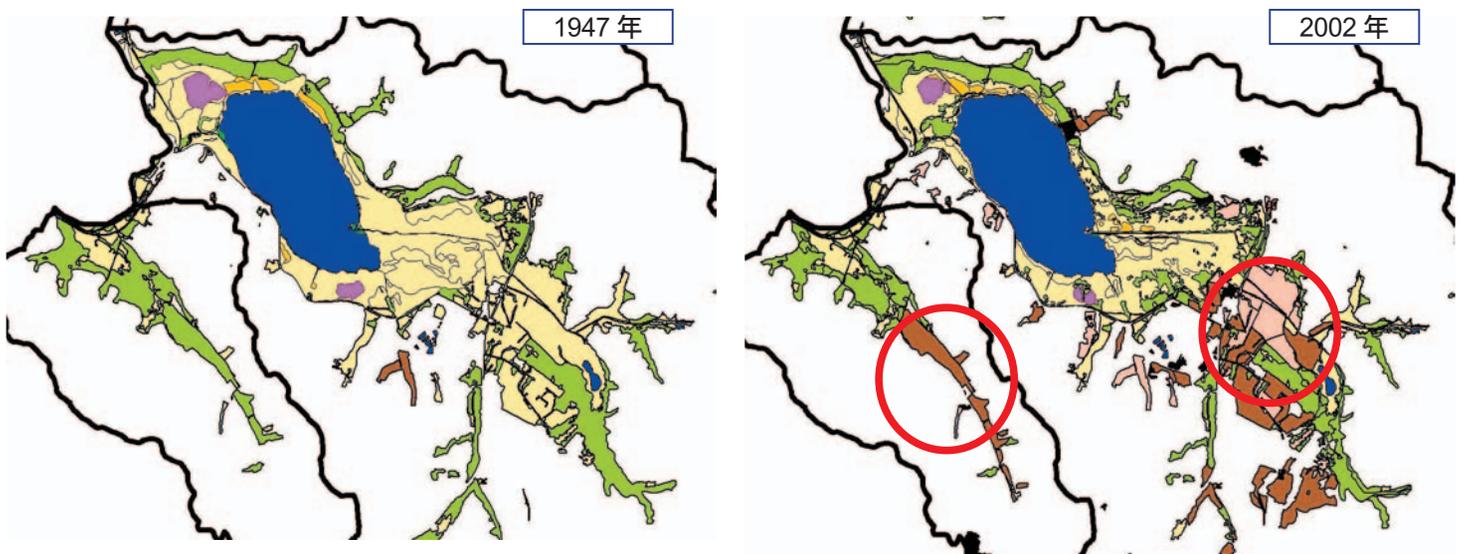


### (3) 湿原の現況と課題

#### ① 湿原の過去の姿と現況

達古武地域における湿原の主要な群落について表 2-1 に、湿原の変遷について図 2-14 に示した。主な群落として、ハンノキ・ヤチダモが林冠層を構成するハンノキ群落、ヨシが優占するヨシ群落、カブスゲなどが優占するスゲ群落、ミズゴケ類・ツルコケモモ・ヤチヤナギなどを含む高層湿原群落が見られる。

この湿原植生のうち、達古武川沿いの国道から東側、中ノ沢の中上流部は農地化が進められてきており（赤丸部分）、湿原面積は減少している。また、湿原の辺縁部ではハンノキ群落が増加傾向にあり、沼西部と南東部に見られる高層湿原群落は縮小傾向にある。これらの現象は土砂の堆積・乾燥化の傾向を示している。



	1947年		2002年	
	面積 ha	比率	面積 ha	比率
ハンノキ群落	364.0	53%	324.6	47%
ヨシ群落	305.8	44%	215.5	31%
スゲ群落	7.8	1%	7.3	1%
高層湿原群落	10.6	2%	6.5	1%
農地			70.4	10%
非利用農地			64.0	9%
合計	688.2	100%	688.2	100%



沼の南部に見られる高層湿原群落

図 2-14. 達古武地域の過去の湿原分布と現在の湿原分布 <sup>(7)</sup>  
赤丸は湿原が農地化した場所

表 2-1. 主要な湿原群落の種組成（数値は出現頻度）<sup>(6)</sup>

種名	ハンノキ-ヤチ ダモ群落	ハンノキ 群落	種名	ヨシ群落	スゲ群落	高層湿原 群落
〔高木層～低木層〕			ヨシ	100%	91%	39%
ハンノキ	100%	100%	イワノガリヤス	100%	34%	1%
ヤチダモ	83%	--	アカネムグラ	77%	53%	3%
カラコギカエデ	28%		エゾオオヤマハコベ	32%		
ミズナラ	6%		イヌスギナ	16%	2%	--
〔草本層〕			ナガボノシロワレモコウ	10%	21%	21%
ヨシ	72%	100%	ナガバヤナギ	6%		
イワノガリヤス	61%	100%	アキノウナギツカミ	3%		
ホザキシモツケ	61%	--	エゾノレンリソウ	3%	--	--
カブスゲ	50%		スギゴケ	3%	--	--
ヤラメスゲ	33%	--	カブスゲ	3%	77%	
ヤマドリゼンマイ	11%	--	ヒメシダ	32%	66%	43%
ヤナギゴケ	11%	--	ツルスゲ	--	34%	--
ナガボノシロワレモコウ	6%		ミスオトギリ	--	28%	1%
ヤチヤナギ		18%	ハンノキ		23%	8%
			チシマノガリヤス		21%	34%
			ヤナギトラノオ	--	4%	--
			ヤナギゴケ	--	2%	--
			ホソバノヨツバムグラ		2%	
			ヤマドリゼンマイ		2%	
			ホロムイスゲ	--	4%	99%
			ツルコケモモ	--	2%	94%
			ヤチヤナギ	3%	58%	86%
			ホロムイツツジ		6%	86%
			モウセンゴケ	--	--	4%
			ヤラメスゲ			1%
			ノリウツギ			1%
			オオカサスゲ	--	--	1%
			クシノハミズゴケ	--	--	61%
			ワラミズゴケ		4%	28%
			ヤリノホゴケ			1%
			ユガミミズゴケ	--	--	1%

## ②湿原再生における課題と再生の方向性

湿原植生については、現存する良好な植生(約260ha)の保全と合わせて、過去に湿原であった未利用地の湿原化も視野に入れながら検討していく必要がある。また、(2)の土砂流入防止の課題を解決していくことにより、植生の急激な変化を抑制することを検討していく必要がある。



(4) 達古武沼の水環境の現況と課題

①水環境の現況

達古武沼は過去には多様な水生植物が見られたが、富栄養化などにより、近年大幅に確認種数が減少している（表 2-2、1991 年の 20 種から 14 種に）。また、生育域も大幅に狭まっており、ヒシ以外の植物の水生植物は南部に集中して生育している（図 2-15）。

表 2-2. 達古武沼に出現する水生植物の変化 <sup>(12)</sup>

は確認種、 は稀な種。赤色がついた種は RDB 掲載種。

種名	1975-76年	1991年	2000年	2003年
<b>浮葉植物</b>				
カラフトグワイ				
オヒルムシロ				
ホソバミズヒキモ				
ネムロコウホネ				
ヒツジグサ				
ヒシ				
<b>沈水植物</b>				
クロモ				
セキショウモ				
ヒロハノエビモ				
ナガバエビモ				
センニンモ				
エゾヤナギモ				
イバラモ				
イトイバラモ				
マツモ				
フサモ				
ホザキノフサモ				
ミゾハコベ				
タヌキモ				
<b>浮遊植物</b>				
ウキクサ				
ムラサキコウキクサ				
ヒンジモ				
確認種数	22 種	20 種	14 種	14 種



ネムロコウホネ



タヌキモ

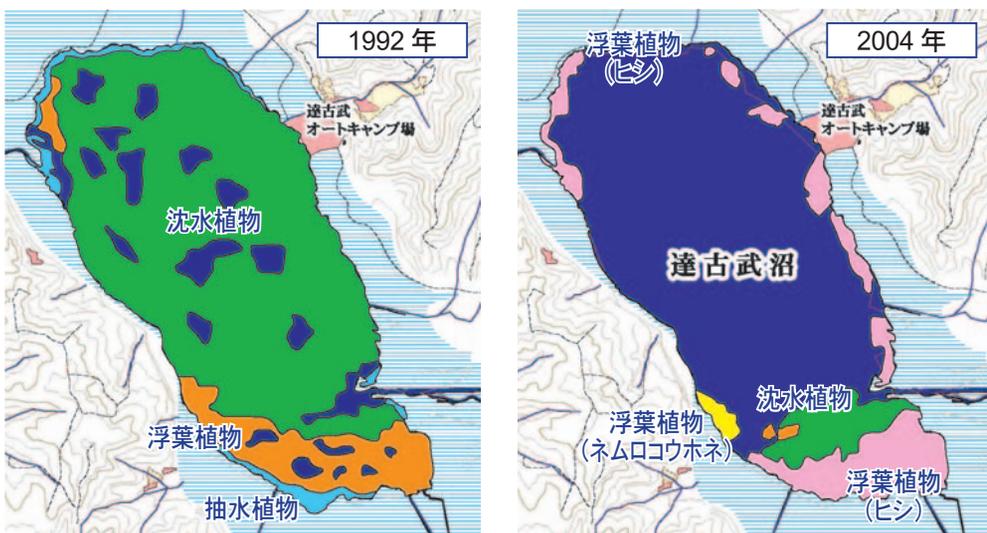


図 2-15. 達古武沼の水生植物分布の変化 ・ 1992 年と 2004 年 <sup>(12)</sup>

達古武沼で確認されている魚類と甲殻類について表 2-3 に示した。外来種で確認されているウチダザリガニ (signal crayfish) は、流入河川 (釧路川との連絡路含む)・湖岸を中心に多数が生息し (図 2-16)、在来種への悪影響が懸念される。

表 2-3. 達古武沼と河川に生息する魚類と甲殻類・2003～2004年<sup>(12)</sup>  
 は確認種、 は文献で記録されている種。赤色がついた種はRDB掲載種。青色は外来種。

科名	種名	沖合	沿岸	移行域	文献記録のみ	釧路川連絡路	達古武川	小河川
ヤツメウナギ科	スナヤツメ							
	カワヤツメ							
ウナギ科	ウナギ							
コイ科	コイ							
	ゲンゴロウブナ							
	フナ							
	ヤチウグイ							
	ウグイ							
	マルタ							
	エゾウグイ							
ドジョウ科	ドジョウ							
	フクドジョウ							
	エゾホトケドジョウ							
キュウリウオ科	ワカサギ							
	イシカリワカサギ							
サケ科	イトウ							
	アメマス							
	サケ							
	サクラマス(ヤマメ)							
トゲウオ科	イトヨ(太平洋型)							
	イバラトミヨ(淡水型)							
	エゾトミヨ							
カジカ科	ハナカジカ							
ハゼ科	ウキゴリ							
	ジュズカケハゼ							
	トウヨシノボリ							
	ヌマチチブ							
カレイ科	ヌマガレイ							
		10種	15種	21種	5種	11種	13種	12種
甲殻類	スジエビ							
	ウチダザリガニ							
	ザリガニ							
	モクズガニ							
		0種	2種	2種		2種	4種	3種



外来種ウチダザリガニ

図 2-16. ウチダザリガニの捕獲数の分布・2003～2004年<sup>(12)</sup>

達古武沼は、1980年代には貧栄養で透明度が高かったが、1996年以降に急激に富栄養化が進み、アオコ（シアノバクテリア）の大発生が見られるようになってきている（図2-17）。また窒素・リンの濃度も急激に高くなってきている。これらの物質の空間分布には偏りがあり、アオコの発生は沼の北部に大きく偏っている（図2-18）。

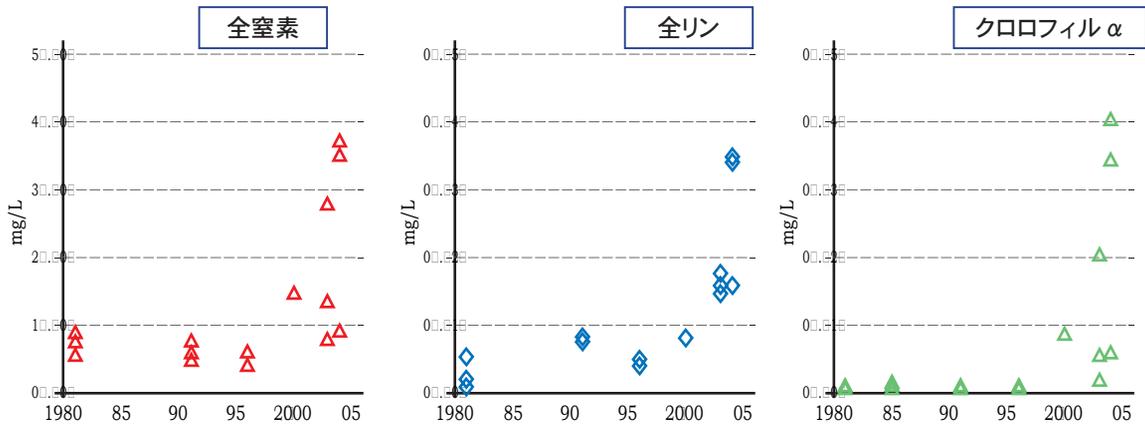


図 2-17. 達古武沼の水質指標（全窒素・全リン・クロロフィルα）の変化<sup>(12)</sup>

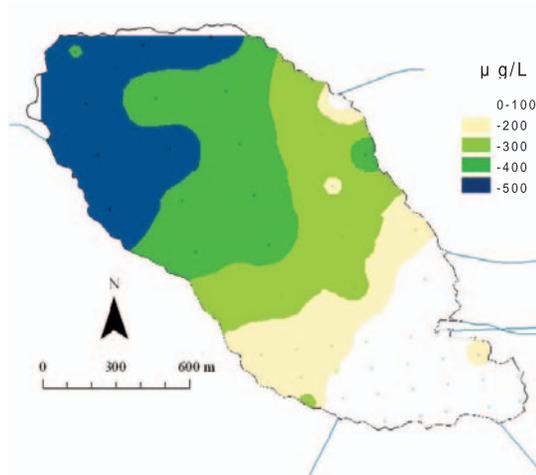


図 2-18. 達古武沼のクロロフィルαの分布状況（高村ほか，投稿中）<sup>(12)</sup>

達古武沼への栄養塩類（窒素・リン）負荷量を起源別に検討すると、釧路川からの逆流水による寄与は小さく、流域における人為的な発生源による寄与が大きかった。また、窒素については、湿地帯における脱窒による除去効果が大きいと推察されたが、リンについては、達古武川上流部の湿地帯を涵養している湧水による寄与が大きいことがわかった。

## ②水環境再生における課題と再生の方向性

現況の栄養塩類の流入量を放置すると、沼の水生植物とそれに依存して生育・生息してきた多様なプランクトン・底生動物および魚類などの動植物相が著しく損なわれると考えられる。水質を過去の状態に戻していくために、応急措置も含めた総合的な対策を検討していく必要がある。また外来種については、個体数を減少させるなどして在来種への悪影響を低減することを検討していく必要がある。

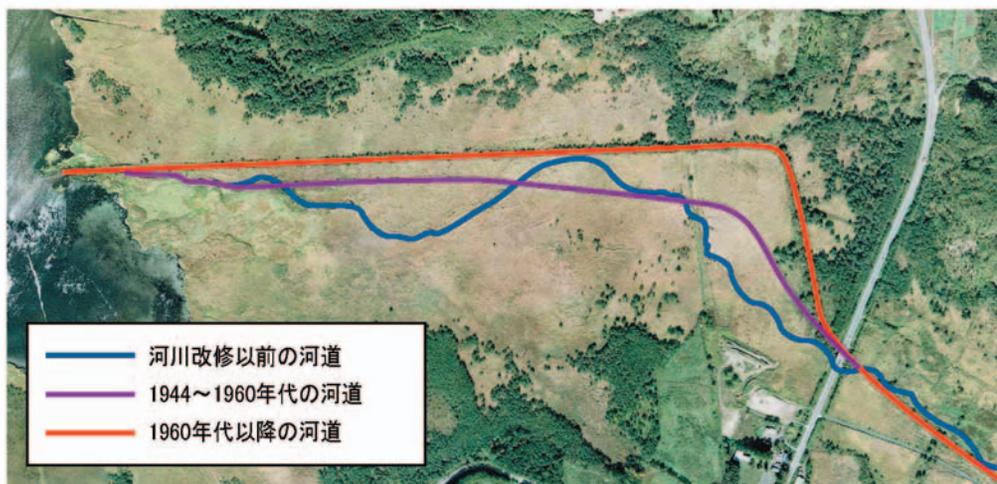
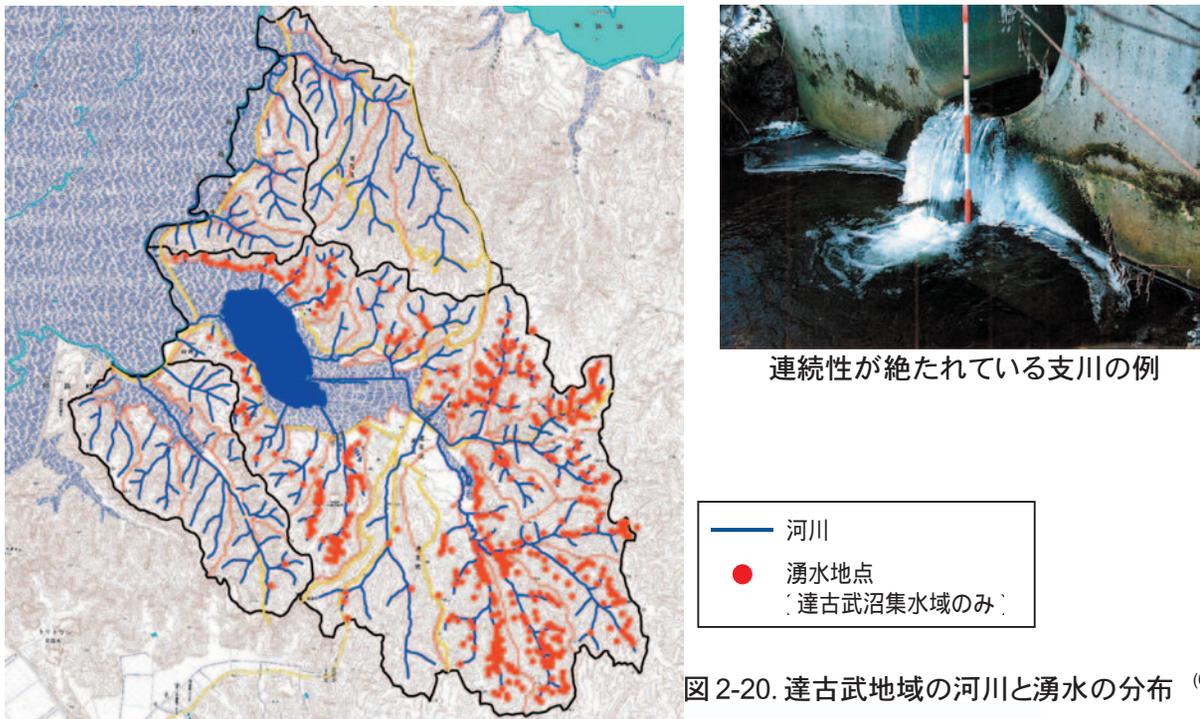


## (5) 河川環境の現況と課題

### ①河川の過去の姿と現況

各集水域の中心河川である達古武川・中の沢・チリシンネ沢のほかにも多数の小河川が存在するが、いずれも湧水を起源とした小規模で距離も短いものである(図2-20)。これらの中でもっとも大きい達古武川は、上流を農地化するための排水路として、1944年に直線化され、その後1960年代後半にさらに河道工事が行なわれて現在の直線河道となった(図2-21、直線河道約2.1km)。また、中ノ沢においても周辺の農地化のため直線化が行なわれていた。

達古武川の支川や沼に流入する小河川では、道路等の横断により設置された工作物により段差が生じ、河川としての連続性が絶たれている箇所が見られる。



## ②河川再生における課題と再生の方向性

達古武川などは直線化により、本来の蛇行河道が形成していた氾濫原などの環境が消失し、土砂の流送量が増大している可能性がある。そのため、将来的には蛇行河道の復元を視野に入れながら、よりよい河川環境のあり方を検討していく必要がある。

また、河川の縦断的連続性が絶たれている箇所では、生息する動物の移動を妨げないよう改善を検討していく必要がある。



## (6) 自然の利用と環境教育の現況と課題

### ①自然の利用の現況

釧路川本川や達古武沼では、カヌー利用が盛んに行われている。また沼北部の町営オートキャンプ場は年間約4,600人の宿泊客があり（2004年度）、ピーク時の8月には約2,400人が利用している。達古武沼の周囲にはサイクリングロードと木道が設置されており、散策などに利用されている。



釧路川と細岡のカヌーポート



達古武オートキャンプ場

### ②環境教育と自然再生普及の現況

この地域では1990年頃からトラストサルン釧路によるナショナルトラスト地での植林事業が行われている。それにともなって、ホテル観察会・どんぐり記念日などの自然観察の行事が実施されてきている。また、達古武沼の周囲の散策路を利用した観察会が市民グループなどによって、年に数回実施されている。

2002年より開始されている自然再生に関わる調査事業では、市民参加型の調査や育苗試験も実施されており、一般市民が調査や再生の取り組みにふれる機会となっている。この地域における自然再生については、これらの機会に周知されているほか、協議会などの会合やウェブサイト、冊子などで紹介されてきている。

### ③自然の利用と環境教育における課題

既存のキャンプ場等の施設も含めて、地域の環境学習の場とするため、自然再生の取り組みにおけるモニタリング調査や修復作業、育苗などを環境学習の実践・体験の場として活用できるよう、プログラムと実施環境の充実を図る必要がある。

小規模な取り組みを主体とする再生事業の場として、積極的な情報発信と取り組みへの市民参加を促す必要がある。それらを通して、釧路湿原の保全・再生への理解を深めていくことが重要である。